

生涯発達とメンタリングに関する理論的検討

渡辺かよ子
(愛知淑徳大学)

【要旨】

周到に配慮されたメンタリング・プログラムは、自尊感情や対人関係の向上、不法薬物使用や暴力等の非行防止等、青少年の発達支援に成果を上げていることが知られている。なぜメンタリング・プログラムは成果をあげるのか。本稿は、メンタリング・プログラムの効果研究の進展を概括した上で、メンタリング・プログラムの有効性に関する諸理論を「人間発達の生態学」の視点から、生涯発達のミクロシステムとメゾシステム、エクソシステム、マクロシステムに類型化し、生涯発達におけるメンタリングの重要性を論証すると共に、今後の研究課題を提起したい。

1.はじめに

本稿は、1990年代以降、各国で拡大しているメンタリング運動の成果を概括し、なぜそのような成果がもたらされるのか、人間発達をめぐる生態学的視点から、生涯発達とメンタリングに関する理論的検討を行おうとするものである。

メンタリングとは、「成熟した年長のメンター (mentor) と若年のメンティ (mentee または protégé) とが基本的に一対一で継続的定期的に交流し、役割モデルと信頼関係の構築を通じてメンティの発達支援を目指す関係性」を意味する。世界のメンタリング運動の中心となっている米国では、20世紀初頭以来の伝統を誇る BBBSA (Big Brothers Big Sisters of America) を中核に 1980年代末以来急拡大し、2005年の MENTOR/National Mentoring Partnership の調査によれば、メンタリング・プログラムに参加している大人は約 300万人となり、1990年代の6倍となっている。現在メンタリング・プログラムに参加していない 4400万人の大人がメンターになることを真剣に考え、メンタリング・プログラムに参加した 96%のメンターが他の人にメンターとなることを推奨している¹⁾。

こうしたメンタリング運動の拡大を促した要因の一つに、メンタリング・プログラムの実証された成果があり、周到に配慮されたメンタリング・プログラムは、自尊感情や対人関係の向上、不法薬物使用や暴力等の非行防止等、青少年の発達支援に効果を上げていることが知られている²⁾。しかしながら、最新の学校型メンタリング・プログラムに関する連邦調査³⁾に示されるように、そうした成果は全てのプログラムに一律に生じているわけではない。なぜメンタリング・プログラムは成果をあげるのか。本稿では、メンタリング・プログラムの効果研究の進展を概括した上で、メンタリング・プログラムの有効性に関する諸理論を「人間発達の生態学」の視点から俯瞰したい。

青少年の自尊感情や共感能力の低さ⁴⁾、孤独感⁵⁾、さらには学力低下や社会性、努力主義を放棄した価値観に危機的状況⁶⁾が認知されているにもかかわらず、それらを克服するためのメンタリング運動やその基礎的理論研究が未成熟な日本の状況は、生涯発達支援とメンタリングに関する理論研究がメンタリング運動を強力に牽引してきた米国等の状況とは、

対照的である⁷⁾。メンタリングの基礎理論は、既にその概要が知られている⁸⁾が、多様な理論相互の連関が明らかになっていない。本稿は萌芽的段階にある日本のメンタリング運動が確実な成果をあげるよう、生涯発達におけるメンタリング・プログラムの成果とその基礎理論の全体構造を「人間発達の生態学」の視点から明示し、生涯発達におけるメンタリングの重要性を論証すると共に、今後の研究課題を提起したい。

2.メンタリング・プログラムの成果と生涯発達

従来、参加者の経験談が中心で、定義の曖昧さやサンプル数の少なさ、実験研究の少なさに加え、多様な要素が混入してプログラムの有効性の抽出が困難であったメンタリング・プログラムであるが、1995年のBBBSのインパクト研究⁹⁾以来、多数のプログラム評価がなされ、2000年以降、〈表1〉のようなレビュー論文が発表されている。

〈表1〉 青少年向けメンタリング・プログラムに関するレビュー論文一覧

著者（発表年）	国（論文数）	結論
Sipe (2002)	米国 (20)	「…フィールドはメンタリングがこれらのプログラムに参加する青少年に生み出す積極的有益性の明白な証拠を持っている。見知らぬ青少年と成人が共に意味ある十分満足できる関係性を形成できるが、時間と正しい態度が必要であることも学んできた。」 ¹⁰⁾
Jekielek 他 (2002)	米国 (19)	「多くのよく計画されたメンタリング・プログラムは危機的状況にある青少年に有益であることを示している。」 ¹¹⁾
Hall (2003)	英国 (35)	「米国の研究はメンタリングが多く的手法で重大効果をもたらすことを示しているが、効果はさほど大きくないのかもしれない。最良の米国での証拠は、メンタリングが問題行動や危険度の高い行動、学業・教育結果、キャリア・雇用結果に何らかの影響を持つかもしれないということである。」 ¹²⁾
Roberts 他 (2004)	英国 (6)	「これらの発見より我々はボランティアによる非指示的メンタリング・プログラムは、危機的状況にある青少年あるいは既に反社会的行動や犯罪行動に関係してしまっている青少年への効果的介入としては推奨できない。我々はメンタリングが効果をもたらさないと示唆しているのではない。多くの異なる種類のメンタリングがあり、あるものは他のものより成果のよりよい証拠を示している。メンタリングの効果に関する我々の知識の現況は、将来性はあるがさらなる研究を必要とする新業のそれと同様である。」 ¹³⁾
Brady 他 (2005)	アイル ランド (35)	「一連の研究はメンタリングが青年に積極的結果をもたらしうることを示している。最善の結果は、強力な関係性が発展し青年が環境的危機と不利益を経験している場合に達成される。積極的結果はボランティアのスクリーニング、監督、訓練、継続的支援、集団活動を含む最良実践の手続きにより確率が増す。こうした実践が無視された場合、プログラムが青年に良からぬ影響を及ぼす可能性がある。」 ¹⁴⁾
Liabo & Lucas (2006)	英国 (15)	「現在メンタリングが一般的に良結果を生み出す介入かどうか不明である。メンタリングはそれゆえ無作為抽出された統制された試みにより評価される必要がある。」 ¹⁵⁾
Phillip & Spratt (2007)	英国 (24)	「青少年向けメンタリングや支援行為が触法行為や態度に最少の影響を及ぼすのは明らかであるが、既存の研究はメンタリング・プログラム内部の異なる様式を指摘している。頻度、期間、強度の問題がより集中的吟味を必要としている。特になぜベアが失敗に至るのか、離脱した青年にとっての示唆は何なのかより多く学ばれる必要がある。」 ¹⁶⁾

Hansen (2007)	米国 (61)	「研究は一貫してコミュニティ型と学校等場所が特定されたメンタリングの広範な良結果を示している。多様な青年の態度、学業や社会的感情的行動分野に結果が生じている。…同定できる積極的実践を行っているプログラムが、よく管理運営されていないプログラムよりも、恒常的により高度な結果を生み出していることは明白である。」 ¹⁷⁾
------------------	------------	--

またさらにメンタリング・プログラムの有効性に関するメタ分析も実施され、2002年のDuBois 他は比較的多様な類型のプログラムに好ましい成果がみられるが、その影響力は僅かであるとし¹⁸⁾、2005年のTolan 他によれば、メンタリングがもたらす非行や攻撃性への影響力は、薬物や学業への影響より大きいとしている¹⁹⁾。2007年にはJolliffe & Farington が、未成年犯罪者の再犯防止のための18のプログラムの成果からメンタリング・プログラムには有望な将来性が見込まれるが、有効性が証明された介入ではないとしている²⁰⁾。2008年にはEby 他が、40の青少年向けメンタリング・プログラム、53の成人向け職場メンタリング・プログラム、23の大学でのメンタリング・プログラムの効果を比較検討し、効果は一般的に僅かで、影響力は大学でのプログラム、職場でのプログラム、青少年向けプログラムの順となっていることを明らかにしている²¹⁾。これらは2008年にRhodesによって以下のように総括されている。「本レビューで明らかになったように、研究成果は複雑な傾向にあり、常に容易には支持と実践を与えない資格認定制限と含蓄に満ちている。しかしながらもし我々がこの介入戦略を擁護すべきであるのであれば、一般に配置されているプログラムと実践が常には青少年への結果を向上させないということを知る危険を冒してでも、我々はその複雑性と格闘する用意がなければならない。」²²⁾

総じて、周到に配慮されたメンタリング・プログラムは、①自尊感情の増進、②親や友人との対人関係の向上、③学校との一体感、④学業成績の向上、⑤不法薬物使用や暴力等の非行防止等、青少年の発達支援に効果を上げていることが知られている。しかしながらそうした成果は全てのプログラムに一律に生じているわけではなく、以下のような特徴を持つプログラムが最良の成果を挙げることが判明している。①メンタリングから最も利を受けそうな青少年を対象に絞ること、②メンターのスクリーニングと研修訓練の厳守、③プログラムの目標と期待の明文化、④メンターとメンティの関係性促進に向けた活動整備、⑤関係性強化と早期離脱を最小限にするためのメンターへの継続的支援提供、⑥親への支援と包含、⑦他プログラムとの連携、⑧継続的質的向上に向け体系化されたモニタリングと評価、である²³⁾。

3.メンタリングと人間発達の生態系

(1)生涯発達をめぐる生態系

上記のように、実証されている効果は概ね僅かであるものの当事者に深い計り知れない喜びをもたらしているメンタリング・プログラムは、なぜそうした効果を生んでいるのであろうか。以下、個人の生涯発達をめぐる環境に着目し、Bronfenbrennerの生態学的システム論の視点から、メンタリングの有効性に関する理論を整理したい。Bronfenbrennerは、メンターを以下のように定義している。「メンターとは、自身が既に熟達しているより複雑な技能や課題を漸次修得するよう導くことによって若人に、人格と能力(コンピテンス)の発展を促進することをめざす年長のより熟練した人物である。その導きは、長期間にわたる多少とも定期的な例示、指導、挑戦を通じて成就される。こうした過程の経過にお

いて、メンターと若人の間に相互の特別な絆が発展していく。加えて、若人のメンターとの関係性に、尊敬や忠義、同定といった感情的な性格を呈するようになる。」²⁴⁾

Bronfenbrenner の生態学的システム論によれば、個人を取り巻く環境には、①ミクロシステム（その時々の養育者のしつけ行動等）、②メゾシステム（複数のミクロシステムに通底する養育者の人格特性等）、③エクソシステム（近隣環境等）、④マクロシステム（社会、文化、制度等）の4レベルがあり、各レベル間の複雑な相互作用が個人の発達に多層的影響を及ぼすことが知られている²⁵⁾。メンタリング・プログラムの有効性は、生態学的システム論の視点から、①生涯発達のミクロシステムとメゾシステムに関するライフサイクル論、②そうしたミクロシステムとメゾシステムの内部における生涯発達の諸相、③生涯発達のエクソシステムに関するソーシャル・サポート、ライフ・コンヴォイ、発達資産等、④生涯発達のマクロシステムに関する社会関係資本と社会統制論等から論証できる。

(2) ライフサイクル論における円環的生涯発達支援

まず人間発達のミクロシステムとメゾシステムに関する理論からメンタリングの有効性を検討したい。それは、養育者のその時々へのしつけ行動、ならびにしつけ行動に通底する養育者の人格特性に関する人的環境に関する理論であり、メンタリングが発達課題の充足と対人関係や社会的適応に好影響を及ぼすことが知られている。これらは、ライフサイクル論に基礎づけられた円環的生涯発達支援である。ライフサイクル論によれば、異なる発達段階にあるメンティとメンターのそれぞれに必要な発達課題、すなわち Levinson が論証した成人前期のメンティにとってのメンターの重要性と、Erikson が唱える成人中期のメンターの世代継承性の充足が、メンタリングのペアにおいて合致し同時に満たされることが、メンタリング・プログラムの有効性の基盤となっている。

Erikson の発達段階論によれば、人間の生涯は八つの発達段階に区切られ、それぞれの段階での葛藤解決が課されているという。第一の乳児期では基本的信頼と不信の葛藤、第二段階の幼児前期では自律と恥・疑惑の葛藤、第三の幼児後期では自発性と罪悪感の葛藤、第四の学童期には勤勉と劣等感の葛藤、第五段階の青年期には同一性と役割混乱の葛藤、第六段階の成人前期には親密さと孤独の葛藤、第七段階の成人期には世代継承性と停滞の葛藤、第八段階の老年期には自我の統合と絶望の葛藤が生じ、それらを解決し克服することが課題となっているという。メンタリングは、第四段階の学童期のメンティにとっての勤勉、第五段階の青年期のメンティにとっての同一性を、主に第七段階の成人期のメンターの世代継承性という課題達成に必要な次世代の養育行動によって促進するものであり、異なるライフサイクルの段階にあるメンティとメンターがそれぞれ相互を必要としているというものである。Erikson の発達段階論からは、メンタリングは、特に第七段階の成人期のメンターの世代継承性 (generativity) を満たすものとなっている²⁶⁾。

さらに60年以上の成人期を僅か3段階でとらえた Erikson の理論を「生活構造」の発達の視点から安定期と過渡期の繰り返しとして精緻化したのが Levinson のライフサイクル論である。職場や家庭における発達支援のエージェントとしてのメンター（＝よき相談相手）は、教師として技術や知的発達をたかめ、後援者として青年の参加を促す力をふるい、青年の〈夢〉の実現を助け力づけるという点で、発達学的に最も重要な役割をはたしているという²⁷⁾。「成人前期に良き相談相手（＝メンター、筆者）に恵まれないことは、児童期に良い親子関係がもてないことと等しい。適切な良き相談相手がいないと、若者はお

となの世界にスムーズに入っていけない。おとなの世界に入っていく道のをスムーズで価値あるものにするには、ある程度の精神的な支え、指導、後援が必要である。」²⁸⁾という。実際のメンタリングの機会については、女性は男性ほどメンタリングの機会に恵まれていないものの、「十分に複雑なメンタリングの関係性は、〈夢〉の進化を支援するものである」という²⁹⁾。

4.生涯発達の諸相とメンタリング（マイクロシステムとメゾシステム）

上記の円環的生涯発達支援は、さらに個人にどのような発達をもらしているのか、発達の諸相について検討したい。メンタリングが影響を及ぼす生涯発達には、社会的情緒的発達、認知的発達、アイデンティに関する発達が認められる³⁰⁾。

(1)社会的情緒的発達

まず、メンタリングという親しい関係性をもたらす社会的感情的発達は、レジリエンスとアタッチメントに関する理論研究によって明らかになっている。

レジリエンスとは、「人が不運な状況に直面し心理的損傷を受けても、意図せずとももとの適応水準に回復する力。弾力性。」³¹⁾を意味する。その意義は、逆境にあってもそれをはねかえす保護要因となる親や、親以外の大人によるメンタリングの重要性を示している。メンタリングがレジリエンスの形成に有効であることは、Werner 等の 40 年にわたる時系列研究によって明らかにされてきた。Werner 等の研究対象は、1955 年生まれのカウアイ島の移民の子どもたちで、その人種構成は、日系、フィリピン系、ハワイ原住民の混血である。母数は 837 人で、サンプル数は 18 歳時点で 614 人、31 歳時点で 505 人、40 歳時点で 489 人となっている。10 歳までの貧困の累積的効果、誕生時の体重や気質等、育児環境の追跡がなされた³²⁾。その後も引き続き 10 代の危機的状況にある子どもの学習困難の原因、精神健康問題、反社会的問題等を追跡している。これらの高い危険度を示した子どもの 3 分の 1（全体の約 10%）は、これらの逆境を跳ね返し、18 歳になるまでに有能性と自信、ケアに満ちた青年に成長していたことが判明している³³⁾。

Werner 等によれば、成人期の社会的適応に相関する保護要因の潜在的変数には、母親の育児能力、子どもの自立性、社会的成熟、学力、自己効力感、拡大家族や友人からの感情的支援があるとされ、これらはライフコース全般に影響を与え、特に逆境で育った子どもにとって重要であるという。「これらは長期にわたって問題となる。これらは、希望を育むものである。」³⁴⁾こうした貧困や親の離婚等の逆境を克服し大人に成長していく青少年の生活には、特にその初期段階において、その気質や容姿、知力と無関係に、その存在を無条件に受容する少なくとも一人の大人が存在していることが判明し、逆境にあっても、信頼、自律、主導の発達に向けた安全な基礎を提供してくれる人に出会うことができれば、有能性、自信、ケアは開花できるという³⁵⁾。

こうした Werner 等の研究は、戦争や迫害による暴力や家族との死別等、悲惨な出来事に遭遇しつつもそれを乗り越えてきた子どもの証言に関する歴史研究によって補完されている。米国独立戦争、南北戦争、第二次世界大戦において、子どもたちがいかにしてこうした耐え難い悲惨を甘受しえたのかを、見知らぬ人のちょっとした親切や心遣いと共に描く Werner³⁶⁾は、今日の青少年問題について「レジリエンスに向けたメンタリング」を提唱している³⁷⁾。こうしたレジリエンス理論は、米国を中心に各国のメンタリング・プロダ

ラムの理論的基盤となり、全ての子どもにこうした「少なくとも一人の大人」を提供することを旨とするメンタリング運動を学問的に基礎づけた。

一方、アタッチメント（愛着）理論からも、メンタリングの有効性が示唆されている。アタッチメントとは、生涯にわたって、不安や恐怖、逆境にある時の安全基地として機能する、「特定の他者との間に築く緊密な情緒的結びつき」と定義される、特定対象との近接関係による情動制御システムであり、安定したアタッチメントが子どもの成長に重要であることが知られている³⁸⁾。近年、従来の母子関係を中心とするアタッチメント研究から、子どもの対人関係の広がりに応じた家庭外の、生涯にわたるアタッチメントの重要性、複数の重要な対象との関係性に着目するソーシャル・ネットワークの研究に進展しており³⁹⁾、メンタリングの関係性とその発展段階にアタッチメント理論の有効性が示唆されている。

(2)認知的発達

メンタリングがもたらす認知的発達は、直接教授ではなく他者の観察学習から身をもって学ぶ社会的学習論⁴⁰⁾や、観察から部分参加、さらには全面参加へと徐々に参加範囲を拡大していく正統的周辺参加論⁴¹⁾等にその論拠を求めることができる。

とりわけ基本的に一対一のメンタリングにおいて直接的な認知的発達の基礎理論となっているのが、子どもの成長発展過程において他者との相互交流において促されるヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の理論である。「発達の最近接領域」とは、「自主的に解決される問題によって規定される子どもの現在の発達水準と、おとなに指導されたり自分よりも知的な仲間と協同したりして子どもが解く問題によって規定される可能的発達水準との間のへだたり」⁴²⁾を意味する。メンティの個別継続的支援にあたるメンターは、メンティの知的水準に応じ、適切な援助やヒントとなる手がかりを提供し、メンティの発達に先回りすることによって、メンティが独力ではなしえなかった水準に能力を伸張している。

(3)アイデンティティの発達

メンターは、「重要な他者」や「役割モデル」として、青少年のアイデンティティの発達に重要な役割をはたしている。自我は他者との関係性の中でのみ存在することができ、他者の自我が自身の経験にはいりこみ、他人の役割をとりいれ、他者の個人的態度を組織化された一般化された社会的態度に到達することによって、十全な発達を達成するといわれる⁴³⁾。青少年は重要な他者との交流から、自分が何者かを定義するのに必要な言語の手ほどきを受け、対話を通じ、人生において何が重要か、愛する人々と共に善を享受する中で学ぶと共に、重要な他者が自身のうちに承認しようとするアイデンティティとの対話や抗争を通じて、自らのアイデンティティを定義しているという⁴⁴⁾。

アイデンティティの発達について、Erikson は、子どもは基本的に両親以外の大人との出会いを強く求めており、「青年は、様々な「認証」の中で自分自身の輪郭を見出す時に、また芽生えはじめた友情や愛や協力関係やイデオロギー的結社への傾倒に徐々に深めていく中で自分自身の輪郭を見出す時に、はじめて心理・社会的同一性に到達しうる」⁴⁵⁾としている。メンターは継続的個別支援によって青少年を承認し、その親しい関係性からアイデンティティ確立に寄与している。

5.生涯発達とメンタリングの有効性（エクソシステム）

生涯発達は近隣環境等のエクソシステムから考察すると、メンタリングがソーシャル・

サポートとして機能していることが判明する。社会的適応に関する心理的資源であるソーシャル・サポートは、「狭義には、家族や友人などのインフォーマルな資源、広義には、専門家や専門機関といったフォーマルな資源も含んだ多様な資源とのつながりである、ソーシャル・ネットワークを基盤とした様々な援助」を意味する。具体的には問題解決に必要な情報、お金や物、手助け、苦しみを軽減する情緒的な関わり等を提供する心理的資源であるが、メンタリングは金銭や物ではなくメンターの専心と時間を通じ各種サポートを包括的に提供している。メンタリング・プログラムでは、両者の互惠性関係性を事前ガイダンスや研修において確認し、事務局のモニタリングによって、利得関係が過剰でも過小でもないよう負債感と負担感の軽減調整に努めている。

またこうした資源は、個人の周囲にあってソーシャル・サポートを提供する集団であるライフ・コンヴォイ⁴⁶⁾としても有効に機能している。コンヴォイ構造の変容は、定年や子育ての終了等の人生の区切りにおいて発生し、メンタリングは、メンターとメンティ、双方のコンヴォイ構造の補強をなすものとなっている。特に高齢者にとっては自らの迫り来る死を受け止め、「超越的ニード」を満たすかけがえのないものとなっている。

さらに、メンタリングは、青年期の発達の必要要素である「発達資産」の一つとしても機能している。発達資産とは、「青少年が健全に成長していくのに必要な積極的關係性、コンピテンシー、価値、自己認識」であり、外的環境資産と内的資産に区別される。外的環境資産としては、支援に関する資産、自己決定権に関する資産、制約と期待に関する資産、時間の建設的使用に関する資産、が掲げられる。一方、内的資産としては、学習への寄与に関する資産、積極的価値に関する資産、社交能力に関する資産、積極的アイデンティティに関する資産が含まれている⁴⁷⁾。メンターならびにメンタリングは、とりわけ外的環境資産に位置づけられる両親以外の大人からの支援と支援関係、ならびに内的資産のうちの積極的アイデンティティに関連する発達資産として、青少年の成長発達に寄与している。

6.生涯発達を促進する社会政策としてのメンタリングの有効性（マクロシステム）

人間発達の生態系における社会や文化、制度等のマクロシステムにおいても、メンタリングは多様な理論的基礎を提供され、社会政策として実践に援用転換されている。

生涯発達を促進する社会政策としてのメンタリングの理論的基礎は、社会関係資本に関する議論によって示されている。社会関係資本とは、人的資本と相補的な「制度化された関係性のネットワークの所有とつながる現実的潜在的資源」⁴⁸⁾、「家族関係やコミュニティの社会組織に本来的に備わっている資源であり、子どもや青少年の認知的社会的発達に有用な資本」⁴⁹⁾、「参加者が共有する目標の遂行により効果的に行動することを可能にする、ネットワーク・規範・信頼」⁵⁰⁾の総体を意味する。その機能には、情報の伝達、当人に関する決定権をもつエージェントへの影響力の行使、社会的信用の確認、アイデンティティや社会的承認の強化⁵¹⁾、があり、これらの機能を持つメンタリング・プログラムは、社会集団（性別、人種、階層）による社会的資本の不平等や学力等の人的資本の問題の解決を、その多寡に決定的な差が生じる青少年期に補充することによって試み、その後の生涯発達を保障しようとする社会政策の重要要素となっている。

メンタリング・プログラムは、非行防止政策として、社会統制論によっても基礎づけられている。社会統制とは「何らかの制裁によって個人の行動を一定の期待された型に合致

させる過程」であり、メンタリングが機能する社会統制には、心理的制裁、無意識的統制、非制度的なインフォーマルな統制が関連してくる⁵²⁾。青少年が非行に走ろうとするのを阻止するのは、非行によって失われる自らへの信頼と人間関係であり、信頼関係を失いたくない場合、あるいは信頼関係を失いたくない人間がいる場合、青少年は非行を思いとどまるというものである。社会統制論は、非行を悲しみ落胆する大人を一人ひとりの子どもに配置することによって社会は非行を防止できるという BBBS 運動の確信を基礎づけ⁵³⁾、今日の多くの非行防止政策としてのメンタリング・プログラムの論拠にもなっている。

さらにこうしたメンタリング・プログラムは、生涯発達をめぐる正義とケアの葛藤を解決する有効な社会政策としてもその理論的基礎が与えられている。メンタリング・プログラムは、社会問題を目前の青少年に焦点化する単純性と、自らが直接特定の青少年に働きかける直接性⁵⁴⁾において、「一般化された他者」の問題として語られる正義や公正の問題を、「具体的他者」に関わる実践的ケアの問題に転換している。メンタリングとケアは、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすける」ひとつの過程であり、相互信頼と深まり質的に変わっていく関係とをとおして成熟成長する点で重なりと共に、特定の個人への専心、その帰結としての諸義務を伴い、最終的にはケアされるものがいずれは他をケアすることができるよう援助すること、押し付けを排除することにおいても共通している。ケアの主要素である知識、リズム、忍耐、正直、信頼、謙遜、希望、勇気の各要素はメンタリングにおいても必要とされる⁵⁵⁾。メンターの傾聴による共感や共苦、激励、助言は、寄付等の貨幣価値を介した間接的影響力の行使ではなく、自らの時間とエネルギー、固有の経験や専門的知識を活かして直接的に当該青少年の「潜在能力」(capabilities)の増進を図る正義や公正と繋がる実践的介入プログラムとして機能している。

7.おわりに

以上、メンタリング・プログラムの効果研究を総括し、生涯発達とメンタリングに関する理論的基礎づけを検討してきた。ここで明らかになったのは、全てのメンタリング・プログラムが効果をあげているわけではなく、プログラム実践における多様な要素が混入しつつ、生涯発達の生態系を形成していることである。メンタリングが機能する生態学的システムは多次元に及び、メンタリングの重要性は、生涯発達の生態系のミクロシステム、メゾシステム、エクソシステムのいずれにおいても既存の理論がその必要性や重要性を論証している。これらの理論は、メンタリングそのものの理念を確認すると共に、メンタリング・プログラムが効果を上げるための多くの示唆と実践的配慮や手立てを構想する端緒にもなろう。

こうした状況にあって、今後の日本におけるメンタリングの理論研究にとって特に重要であると思われるのは、今日まで殆ど進展していない生涯発達とレジリエンスに関する時系列的研究と歴史研究の継承発展である。それは、メンタリング運動の興隆に決定的重要な理論的役割を果たした Werner による一連のレジリエンス研究が示唆する、逆境克服に向けた「希望」にまつわる課題であり、貧困や親の離婚等の逆境を克服し大人に成長していく青少年の生活には、特にその初期段階において、その気質や容姿、知力と無関係に、その存在を無条件に受容する少なくとも一人の大人が存在であり、これらの保護要因こそ「希

望」を育むものであるからである。メンタリング・プログラムがこれらの保護要因の一つとして、日本社会という人間発達の生態においても有効に機能するよう、その日本文化や歴史的文脈、社会状況との適合性の精査とその理論研究が喫緊の課題となっている。

¹ MENTOR (National Mentoring Partnership), *Mentoring in America 2005: A Snapshot of the Current State of Mentoring*, 2006

² Cavell, T. et al., Strengthening Mentoring Opportunities for At-Risk Youth, *Policy Brief*, February, 2009

³ National Center for Education Evaluation and Regional Assistance, *Impact Evaluation of the U.S. Department of Education's Student Mentoring Program*, 2009

⁴例えば、中里至正・松井洋編『異質な日本の若者たち：世界の中高生の思いやり意識』、ブレーン出版

⁵ OECD, *Student Engagement at School: A Sense of Belonging and Participation, Result from PISA 2000*, 2003, pp.20-22

⁶恒吉僚子『子どもたちの三つの「危機」：国際比較から見る日本の模索』勁草書房、2008年他

⁷渡辺かよ子『メンタリング・プログラム』川島書店、2009年、pp.41-162

⁸同上 pp.179-193

⁹ Grossman, J. B. & Tierney, J. P., Does mentoring work? An impact study of the Big Brothers Big Sisters program, *Evaluation Review*, 22, 1998

¹⁰ Sipe, C. L., Mentoring Programs for Adolescents: A Research Summary, *Journal of Adolescent Health*, 31, 2002

¹¹ Jekielek, S. et al., Mentoring Programs and Youth Development, *Child Trends*, 2008

¹² Hall, J. C., *Mentoring and Young People: A Literature Review*, The SCRA Centre, University of Glasgow, 2003

¹³ Roberts, H. et al., Mentoring to Reduce Antisocial Behaviour in Childhood, *British Medical Journal*, 328, 2004

¹⁴ Brady, B. et al., *Big Brothers Big Sisters Ireland Youth Mentoring Programme: Evaluation Report*, Galway Child & Family Research & Policy Unit, 2005

¹⁵ Liabo, K. & Lucas, P., *One-to-one Mentoring Programmes and Problem Behavior in Adolescence, What Works for Children Group: Evidence Nugget*, Economic & Social Research Council, 2006

¹⁶ Philip, K. & Spratt, J., A Synthesis of Published Research on Mentoring and Befriending for The Mentoring and Befriending Foundation, University of Aberdeen, The Rowan Group, 2007

¹⁷ Hansen, K., One-to-one Mentoring: Literature Review, Big Brothers and Big Sisters of America, 2007

¹⁸ DuBois, D. et al., Effectiveness of Mentoring Programs: A meta-analytical Review, *American Journal of Community Psychology*, 30, 2002

¹⁹ Tolan, P. et al., *What We Know About What Mentoring Can and Might do for Youth Crime, Presented at The Fifth Annual Jerry Lee Crime Prevention Symposium: Systematic Evidence on What Works in Crime and Justice: Raising Questions and Presenting Findings*, May 3, 2005

²⁰ Jolliffe, D. & Farington D. P., A Rapid Evidence Assessment of the Impact of Mentoring on Re-offending: A Summary, Cambridge University: *Home Office Online Report* 11/07, 2007

²¹ Eby, L.T. et al., Does Mentoring Work? A Multi-disciplinary Meta-analysis Comparing Mentored and Non-mentored Individuals, *Journal of Vocational Behavior*, 72-2, 2008

²² Rhodes, J., Improving Youth Mentoring Interventions Through Research-based Practice, *American Journal of Community Psychology*, 41, 2008

²³ Cavell, et al., op. cit

²⁴ Bronfenbrenner が日本人の同僚とのインフォーマルな会話で述べた定義。Hamilton, S.P., *Apprenticeship for Adulthood: Preparing Youth for Future*, The Free Press, 1990, p.156

²⁵ Bronfenbrenner, U., *The Ecology of Human Development*, Harvard University Press, 1979

²⁶ Erikson, E.H. *Childhood and Society*, Norton, 1963 (仁科弥生訳『幼児期と社会』(1・2)みすず書房、1977年) Erikson, E.H. ed., *Adulthood*, Norton, 1978. Erikson, E.H. *The Life Cycle Completed: A Review*, Norton, 1997 (村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房、2001年)

- 27 Levinson, D. J. et al., *The Seasons of a Man's Life*, Ballentine, 1978, pp. 97-101. (南博訳『ライフサイクルの心理学』(上) 講談社、1992年、pp.177-183)
- 28 Ibid., p.338. (同上訳(下)、p.265)
- 29 Levinson, D. J., *The Seasons of a Woman's Life*, Ballantine Books, 1997, p.239
- 30 Cf. Rhodes, J., A Model of Youth Mentoring, in Dubois, D. & Karcher M. eds., *Handbook of Youth Mentoring*, Sage, 2005. Darling, N., Mentoring Adolescents, Dubois, D. & Karcher M. eds., Ibid..
- 31 Rutter, M., Resilience in the Face of Adversity, *British Journal of Psychology*, 147, 1985
- 32 Werner, E. E. & Smith, R. S., *Kauai's Children Come of Age*, University of Hawaii Press, 1977
- 33 Werner, E. E. & Smith, R. S., *Vulnerable but Invincible: A Longitudinal Study of Resilient Children and Youth*, McGraw-Hill, 1982 (1989)
- 34 Werner, E. E. & Smith, R. S., *Journeys from Childhood to Midlife: Risk, Resilience, and Recovery*, Cornell University Press, 2001, p.164.
- 35 Werner, E. E. & Smith, R. S., *Overcoming the Odds: High Risk Children from Birth to Adulthood*, Cornell University Press, 1992, pp.205-209
- 36 Werner, *Through the Eyes of Innocents*, Westview Press, 2000. Werner, E., *In Pursuit of Liberty*, Potomac Books, 2009
- 37 Henderson, N. et al. eds., *Mentoring for Resiliency*, Resiliency in Action, 2000
- 38 Cf. Bowlby, J., *A Secure Base: A Clinical Applications of Attachment Theory*, Routledge, 1988 (二木武監訳『母と子のアタッチメント：心の安全基地』医歯薬出版、1988) Holmes, J., John Bowlby & Attachment Theory, Routledge, 1993
- 39 マイケル・ルイス&高橋恵子『愛着からソーシャル・ネットワークへ』新曜社、2007他
- 40 Bandura, A., *Social Learning Theory*, Prentice Hall College Div., 1976
- 41 Lave, T. & Wenger, E., *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press, 1991 (佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』産業図書、1993)
- 42 ヴィゴツキー『「発達」の最近接領域の理論：教授・学習過程における子どもの発達』(土井捷三・神谷栄司訳) 三学出版、2003、pp.63-64
- 43 Mead, G. H., *Mind, Self, and Society*, University of Chicago Press, 1934, p.158 (稲葉三千男訳『精神・自我・社会』青木書店、1973、p.169)
- 44 Taylor, C., *The Ethics of Authenticity*, Harvard University Press, 1991, pp.33-34(田中智彦訳『<ほんもの>という倫理』産業図書、2004、pp.46-47)
- 45 Erikson, 1997, op. cit. (『ライフサイクル、その完結』p.144)
- 46 Kahn, R. & Antonucci, T. C., Convoys over the Life Course: Attachment, Roles and Social Support, In: Baltes, P. & Brim, O. eds., *Life-Span Development and Behavior*, Vol. 3. Academic Press, 1980
- 47 Scales, P. C. & Leffert, N., *Developmental Assets: A Synthesis of the Scientific Research on Adolescent Development*, Search Institute, 1999. Lerner, R. M. & Benson, P. L., eds., *Developmental Assets and Asset-Building Community: Implication for Research, Policy and Practice*, Kluwer Academic/Plenum Publishers, 2002. 立田慶裕・岩槻知也編著『家庭・学校・社会で育む発達資産：新しい視点の生涯学習』北大路書房、2007
- 48 Bourdieu, P., Forms of Capital, in Halsey, A. H., et al. eds., *Education: Culture, Economy, Society*, Oxford University Press, 1997 (1983)
- 49 Coleman, J., Families and Schools, *Educational Researcher*, 32, Aug/Sep 1987. Coleman, J., *Foundations of Social Theory*, Belknap P of Harvard University Press, 2000 (1990)
- 50 Putnam, R.D., *Bowling Alone*, Simon & Schuster, 2000, p.22
- 51 Lin, N., *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press, 2001. (筒井淳也他『ソーシャル・キャピタル：社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房、2008)
- 52 碧海純一『法と社会』中央公論社、1967 (2004)、pp.63-78
- 53 McGill D. E. et al, *Blueprints for Violence Prevention*, Big Brothers Big Sisters of America, 1997, p.8
- 54 Freedman, M., *The Kindness of Strangers: Adult Mentors, Urban Youth, and the New Voluntarism*, Cambridge University Press, 1999 (1993), pp.56-58
- 55 Mayeroff, M., *On Caring*, Harper Perennial, 1971 (田村真・向野宣之訳『ケアの本質』ゆみる出版、1987)